

# 義倉帳と九等戸

時野谷 滋

大日本古文書一に収められてゐる天平二年安房

国及び越前国義倉帳断簡は、義倉制そのものの研

究の場合には勿論重要な史料として用ひられるが、

なくこの時代の社会構成、就中所謂階層分化を論

ずる場合にも屢々引用され、野外戸の夥しく見え

ることが注目されてゐる。しかし考えてみると、

このポピュラーな史料に対する史料性格批判は

これまで行はれてゐない。そこで私はこの基礎的

作業を行ひ、その史料の限界を決定することを試

みたいと思ふ。が、それは要するに、二の二葉の

断簡に記された二、三行の数字が、どの程度の正

確さを以て当時の社会構成の実態を写取つてゐる

かを求明すれば足りるであらう。但しこの作業には他の複雑な問題がまつはりつくので、私の手に負ひかねる呉が少くない。

切に諸家の御叱正を乞ひたいと思ふ。

## 二

さて私がこの小論を取上げるのは、次に掲げる天平二年安房越前両国の義倉帳に記された九等戸及び所謂外戸の構成が、社会の実態をどの程度正確に写取つてゐるかといふことである。

（佐房国）

見戸肆伯壹拾伍（二戸中下 二戸中下 三戸下上）

右下下已上捌拾捌戸、見輪義倉粟、

多伯貳拾伍戸、不在輪限、

## (裁前圖)

天平二年見戸壹仟壹拾玖畑 上上戸一、上中戸四、上下戸七、  
下上戸十二、下中戸二十三、下下戸一  
 下戸 計九百廿四、不在輸粟之例

以下二箇條に分けて吟味したいと思ふ。

オ一に九等戸の格付、即ち應云々の用語を借り  
 れは是戸はいかにして行はれ、その結果はこの程  
 度正確であつたかといふ問題を検討しやう。

いふまでもなく天平二年の義倉帳は、大宝令の  
 規定に則つて作製された筈である。しかし周知の  
 やうに同令は現存しないから、面倒でもこれを復  
 旧しておく必要がある。まづ養老令の規定は次の  
 通りである。

(イ) 凡一位以下、及百姓雜色人等、皆取戸粟以爲  
 義倉

(ロ) 上々戸二石。上中戸一石六斗。上下戸一石二  
 斗。中上戸一石。中々戸八斗。中下戸六斗。  
 下上戸四斗。下中戸二斗。下々戸一斗。

(ハ) 若稻二斗。大麥一斗五升。小麥二斗。大豆二  
 斗。小豆一斗

(二) 各當粟一斗。皆與田租。同時收量。

一方慶雲三年格が

準令。一位以下及百姓雜色人等。皆取戸粟以

爲義倉

といつてゐるから、まづ(イ)の部分はそのまま大宝  
 令に存任した。次に集解義倉条の占記に

曰。如何定九等。

と見えるし、前記義倉帳もさうなつてゐるから、

(ロ)の九等戸の規定の存したことも間違ない。また

菟川政次郎博士の研究によれば、前記安房國義倉

帳の輸粟額は、この規定によつて算出した結果と

丁度一致する。註ニ従つて輸粟額も新占兩令に變化は

ない。結局(ロ)の部分は大宝令に存任したといへる。

(ハ)の換算規定も前掲占記に引く天平八年格に

取稻一斗。藍粟一斗。雜穀輸家。任情聽之。

とある規定と異なるから、即ち恐らく養老令施行

當時の實際の規定ではないから、大宝令のそれを

あると考へてよからう。(二)の部分も稻に換算する

規定があつたことすれば、大宝令にもあつたとして

不自然ではないし、寧ろ田租及び調庸に納明が明

示されてゐることから考えれば、この規定もあつてであらう。

さうすると、義倉に關する規定は、新古面令の面に文字の相違はありうるとしても、その内容には全く変化がなかつたのである。

さてこの場合、九等戸をかつ規準は何小。古記は前掲の向に對して

答。計資賦定耳。……即計資賦。定九等。亦臨時注重耳。

としてゐる。それは、その資賦はこのやうな方法で計算された小。直接これに對して答へてくれる史料は存しない。

### 三

ここに例の大室二年美濃國戸籍を振返つてみやう。周知のやうに同一戸に對して上政戸・中政戸・下政戸の三等級と共に前記九等級を以て定戸した戸籍である。この三等定戸が丁数、九等定戸が食鹽にもとづくことは古く<sup>通説</sup>戸籍博士以来の通説である。さうであれば、この場合の九等定戸は義倉

のためのものと考へるのが當然で、これまた古来の通説といつてよい。但しこの九等戸に對し、三浦國行博士の「食鹽ノ外ニ、課丁ノ多少ヲモ参照スルトコロアリ」といふ疑念を、<sup>註四</sup>戸籍博士とは全く別の根據から挿むことも出来る。といふのは、大室令に於ける九等定戸は、宮本教氏の指摘されたやうに、義倉の外、差役の場合があり、<sup>註五</sup>後者の場合は丁数と食鹽とを問題とするからである。しかし既に宮本氏のいはる通り、丁数による三等戸の記載があるし、また考へてみれば後者は役丁差遣の順序を定めるにすぎない。つまり丁数と食鹽による定戸がなされてゐれば、差科の順序は定め得るのである。従つて美濃が籍に於ける九等定戸は、義倉のため、食鹽によつて行はれたものといふ通説は支障をさるべきであらう。

さうすると、ここに一つの注目すべき問題が提出されねばならない。といふのは、最近彦屋俊哉氏が西海道戸籍の口分田長田額を計算した結果、この戸籍が淨御原令に基くことを明かにし、進んでこの美濃國戸籍も同令に基くと論ぜられたから

証六

である。もしやうであれば、従来大宝令に於けるとされてゐた義倉の制が、淨御原令に遡ることになる。尙らくこの問題を考へよう。

虎尾氏も美濃國戸籍をも淨御原令に基くものと考へられねば様は次の二つである。

(1) 各戸の口数の内訳を認すに當つて男・女・奴・婢別に小計を記載してゐることは、戸面直戸籍から知られる班田方式へ重番註、淨御原令による班田方式へ背景において考へれば容易にその理由を解することが出来るが、

「それ以外の理由は考へ難いのはあるまいか。」

(2) 「大宝令が大体大宝三戸初頭から実効力を発揮し出したと考へられるから、」大宝二戸の世籍を、大宝令の施行による世籍と速断することとは出来ないし、一方「淨御原令には大戸一籍の規定が存し、その規定に従つて持統天皇四年を起算として同十戸、大宝二年と定期の世籍がなされた」と解することが可能となる。

(3) については虎尾氏も御覧下さであらうが、養老五年戸籍にも同氏のおぼられにやうな例が見ら

れる。例へば下總國倉麻郡意析郷藤原金弟の戸の場合をあげると五女以下の男・女・奴・婢を別についての小計も記載されてゐる。従つてこの場合と同様に、大宝二年美濃國の場合も、淨御原班田方式を背景に置かないでも解釈出来るのではなからうか。事実さういふ解釈が十分成立つてゐる。

口については今江玄道氏が詳しく反駁してゐる。私はその内容の一々については後述のやうに首肯しかねる点を少からず見出すが、なほ全体として支持したいと思ふ。

さて今江氏は進んで大宝二戸戸籍が大宝令に基づくことを示す明かな史料として、「務・道・進等の字が耐いてゐる」自位者の位階名記載を挙げてをられるが、私は更に勲位記載を加へたいと思ふ。勲位については別に私見をまとめるつもりであるが、これは大宝令に創設されたものである。しかし虎尾氏が問題にされたのは「官名位号等を除いて實際にこの令が各戸に到着して全面的に採用せられるに至つた時期である。この文章から察すれば、虎尾氏はすなわち位階名記載が大宝令

に基づくことは十分認めて置られると思ふ。従つてこの反論は虎尾氏によつて打撃にはならないのである。また大宝元年八月八日明法博士を六道に派し、新令を講せしめた際に、如何なる理由か純日本紀の訓註によれば西海道を除いてゐる。さうすると、西海道の場合は大宝令が全面的に採用され長時期が、或は遅れたのではないかといふ疑ひを生ずる。従つて今江氏が、大宝二年の戸籍が大宝令に基づくものであり、虎尾氏の「指摘された田畠の記載については、別途の解釈が必要であらう」とされたのは武断にすぎるといはねなるまい。即ち、大宝令の官位令は元年三月八日に施行されてゐるのであるから、少くとも西海道戸籍に關する限り、位階名勲位名記載は大宝令に拠り、校田額記載は淨御原令に基づくといふ虎尾氏の早説は、なほ昭和二十九年度「古代史学界」の最も難かしい成果として尊重するべきである。

ところで問題は美濃國戸籍である。これを淨御原令に基づくとする新説の根拠は以上の考察によつて崩れたと思ふ。しかし実は義倉の創始を大宝

令とするには、まだ問題が残つてゐる。それは純日本紀大宝二年二月条に

諸國大租。豐起稻後義倉。并兵衛敷文。始送干辨官。

とある記事の解釈である。義倉が大宝令に始まるすれば、その実施が早すぎはしないかといふ疑問である。義倉敷文の辨官に始めて送られたといふのであるから、少くともこれ以前に、何等定戸がなされ、國毎の輸粟額が決定されてゐた筈である。とすれば何箇月か前に大宝令は実施されてゐなければならぬ。しかしこゝで考ふべきは、大宝令は坂本太郎博士のいはれるやうに「成るに従つて各部分より施行された」といふことである。<sup>註八</sup>前述のやうに官位令は令全体の完成以前にすでに施行れてゐるし、今江氏は大宝元年中に公式・衣服・官貢・假寧・祿・軍防の諸令が実施されたことを推定して置られる。そして純日本紀によれば元年六月度務一に新令に依るべきことが令せられ、八月前述のやうに新令を講ずるため明法博士が六道に差遣されてゐる。この明法博士は令に見え

ない筈であるところを見るに、時に新令の講師として臨時に任命されたのではなからうか。とすれは二にも新令施行に対する政府の眞摯な熱心とが窺はれる。かういふ背景を考えると、義倉の如きも新制であるだけに、或は成るに同時に実施されたであらう。少くとも大宝元年中に実施に移されたと考へてよいと思ふ。

以上要するに、義倉は大宝令で始めて採用され、美濃國戸籍の九等戸の記載は大宝令に基くといふ通説は今日なほ成立つと思ふ。

では、この九等定戸は具体的に考へて如何なる方法で行はれたらうか。これより前、食鹽による三等定戸は、すでに日本書紀によれば天武天皇四年に行かれた例があるが、具體的方法は解らない。しかし、とむかく三等九等の定戸が唐制に則るものであることは間違ない。曾我部靜雄博士がこの点を詳しく追求してをられる。<sup>註九</sup>では唐の場合にどうか。実はそれもよく解らない。しかし次に掲げる唐会要八十五所收の天監四載三月勅は推測の材料を与へてくれると思ふ。

自今已後、每至定戸之時、宜委縣令与村都對定、審於家議兼以實賦不得皆有愛憎以爲高下徧其虛妄令不均平使無苦之中皆休九當仍委太守詳覆定後明之奏書

これによると定戸の実務は縣令が實賦を察して定めるのである。家議を審にすとはいかなる範圍を指すか審かでないが、広く村郷の人々の評判を審察することであらうか、或は村正等の意見を問ひてといふのであらうか。何れにせよ定戸の基準となる食鹽を量る尺度はあつたに相違ないが、その当て方は家議を審察した縣令の判断によつて決せらるべきで、縣令個人の愛憎が入つてはならず、欺かれてはならないといひ、その定戸を太守が再検討して決定せよといふのである。つまり戸の實賦の評価は、一定基準にむとづく機械的な計算によつて算出されるのではなく、事實上縣令の認定によつて決せられたのである。

唐の中期でさへかうであつたとすれば、まづ天武天皇四年迄の

自今以後、明察百姓、先知富貧、簡定三等



といふ詔の実施は、文字通り地方官の明察によるものであつたであらう。恐らく大宝令の九等戸制の場合も定戸の方法は、目的は別であつたけれども、唐制に倣つたであらう。とすれば、我國では、郡司が定戸の義務に当り、国司が覆審して九等戸帳を収製してと思はれる。但し大宝令施行当初、郡司は何を尺度として与へられて定戸したか不明である。或は与へられなかつたのではなからうか。養老頃には曾我部博士の指攝されるように、<sup>註。</sup>實際上奴婢の数によつて定戸が行はれた。しかし美濃国戸籍の場合は宮本氏の詳しい分析によつて、さうでないことが明かにされた。

同一郡に於てなほ奴婢の所有者が下々戸に定戸され、非所有者が下中戸に入つてゐるのである。無論奴婢も主要な資財に数へられたに違ひないが、単に貧富を明察して九等に定戸せよといふのであれば後にも触れるやうに家宅、米、牛馬なども含まれ、旧例も重んぜられ、種々醫藥の上定戸されたのであらう。

この場合、唐とは違つて郷里の事情に精通した郡司

が資財評価をしたとすれば、郡司の審察が公平に行はれる限り、その認定にはかなり正しく実情が反映してゐるかもしれない。しかしまたかういふことも考へられる。つまり政府は資財測定に明確な尺度を与へ、また測定法を示すことが出来なかつたとすれば、国毎に義倉粟の額を指令し、国はそれを郡に割賦して、郡は里に配分し、それに合せて郡司が前述のやうな方法で定戸しなかつたかといふことである。少くとも義倉が税である以上、予定額が考へられ、国毎に目標額を示すことも当然行はれたのではないか。この臆測を具体的に述べよう。

郡名	里名	中下戸	下下戸	下中戸	下下戸	計	備考
山方郡	三井田里	一	二	七	四〇	五〇	奴婢数 一四
加毛郡	半布里	一	二	九	四二	五四	三一

この表によれば、奴婢所有者数及び所有形態からみて、全体として貧富の差がありそうな里の定戸が、略々等しい比率を以て行はれてゐる。他に里全体の郷戸を知り得る戸籍はないが、一里五〇戸であれば、各里の義倉粟の割宛額に大差なく、從

つて定戸の際の各等戸数割宛額を略々等しかつた  
 であらう。各郡の各里には中下戸一、下上戸二等  
 という数戸が割宛られたとすれば、少くとも各里  
 の最富戸が中下戸に定戸されたであらう。屑県  
 郡肩々里の所有奴婢計五九口という恐らく他に卓  
 絶した富戸が、奴婢計十三口、若しくはそれ以下  
 の戸と同一等級の中下戸に定戸されたのは、かう  
 いふ理由からであつたと思はれる。

以上は臆測に過ぎないことを繰返しておきたいが、  
 しかしとるかくこの格付は、あくまで郡司の認  
 定によつて行はれたといふことを度外に置くこと  
 は出来ないと思ふ。そこから郡里によつて定戸の  
 ための資財評価の基準に差があつたのではないか  
 という疑念を生ずる。従つてこの史料によつて  
 所謂階層分化を論ずる場合は、慎重な考慮が必要  
 であらうと思ふ。

#### 四

大室令施行当初の定戸の具体的手続は以上のや  
 うに推測されるが、和銅年間に到つて定戸の基準

が明示された。即ち義倉系古記に引く和銅六年格  
 は次のやうにいつてゐる。

其資財百貫以上爲上々戸。……二貫以上爲下  
 々戸也。

これはさらに同八年、次のやうに改訂された。

其資財准錢三十貫以上爲上々。……一貫以上爲  
 下々也。

この資財を資貨に換算し、その額によつて定戸す  
 るといふ規定は和銅格に始まるとしてよからう。  
 周知のやうに我國に於ける資貨の流通は和銅開珎  
 の鑄造以後としか考えられないからである。そ  
 して集解義倉條に引く天平宝字二年格は和銅八年  
 格に変更を加へてゐない。従つて天平二年の義  
 倉帳に於ける九等定戸は和銅八年格に換つてゐる  
 としてよい。

さてこの格で定戸の基準は明確になつた。し  
 かし尚問題は、その場合資財の計算評定は具体的にい  
 つて正確に行はれたか、というよりと行ふことが  
 可能であつたかといふことである。周知のやう  
 にわが貨幣制度は実社会の必要から生れたもので



はない。従つて政府が和銅以降天つぎ早に法令を發して、貨物の流通を奨励しても容易に行はれなかつたのである。勿論當時の強力な政府の重要政策ではあつたし、また純日本紀によれば和銅七年には通貨禁止令まで出てゐるから、貨物の流通を遏少評價することは戒めねばならない。

しかし安房や越前などの「遠国」乃至「中国」にこれを認めることは不可能であらう。

養老六年、越前国と錢調を輸してゐるが、民戸から直接貨物を調を徴集したとは考へられない。

ともかく、和銅兩環の銅貨を行ふといふのは元年八月である。資財を貨物に換算して評價せよといふのは六年二月である。貨物の流通しない社会に於いてこの格が行はれる筈がない。そこで前述の和銅八年五月格は、次のやうに資財換算の基準を定めてゐる。

又云。奴一口准直六百文。婢一口四百文。注意すべきは奴、婢について年令の差を問題にしない点である。しかしこれでは縁奴と正奴と同値となり、不公平になるので果敢に急務に引く要

龜三年十一月官符は次のやうに規定してゐる。

九等戸奴婢價。依長幼平估仍爲正価。

さうすると和銅後格の換価規定は、甚だ粗雑であつたといはねなるまい。

では奴婢以外の資財についてはどうか。少く

とも定戸と兩附して定められた史料は現はれない。

では史料は残つてゐないが、實際に行はれた形跡があるかといふと、寧ろ反対である。純日本紀養老元年十一月条の詔は次のやうに云つてゐる。

九等戸以賤多少勿長。准賤爲定矣。

前述のやうに、これは當時奴婢の数のみによつて定戸の行はれたことを示す史料に他ならない。つまり事實上、奴婢の数のみによつて定戸が行はれてゐたため、これを規定された正価に換算して資財を算出して、口数そのものによつて算出してと差がなかつたのである。そこで換算の手続を省き、直ちに口数によつて定戸することが行はれてゐた。それを禁ずるのがこの詔である。さて前述の美濃国の場合は、奴婢の口数のみが定戸の標準ではなかつた。さうすると、この変

此は何時から始まつたか。それは恐らく和銅格以来である。前記養老格の賦に於いて云々といふのは、單に奴婢の數のみを基準とせず、資賦全体を基準として定戸せよといふ意味であらう。

では奴婢以外の資賦は何であらうか。大宝令に於て分条は相續賦性の対象として、宅・家人・奴婢・賦物を掲げてゐる。こゝに土地は入つてゐない。<sup>註三</sup>但し同条古記は新墾田・園圃等を挙げてゐる。これは當時の通例に従つたものである。

か。しかし勿論相續と義倉の場合とは別であるから、園地・宅地、或は口分田なども資賦に含めて考へられたかもしれない。次に大宝令のいふ「賦物」とは具体的に何であらうか。天平十九年の法隆寺及び大安寺の資賦帳<sup>註四</sup>などから察すると、牛・馬・米・布帛・金貨・貴金屬製品などが、その主要な内容であるらしい。

しかしかういふ資賦を評価することは、前述のやうに換算規程が定められない限り不可能であつた。以上の考察を天平二年の義倉帳に於ける定戸に

絞れば、恐らく所有奴婢の口數を基準とした定戸であると判断せざるを得ない。従つて、美濃国戸籍の九等定戸とは、その格付の標準を異にするといはれはならない。そして配足ではあるが郡司の本貫は郡であるから、郡内で上級に定戸されるのは、定戸の実務を行ふ彼等自身であつたことと考へねばなるまい。奴婢以外の資賦の格付評定を自らの資賦について行ふことについて、彼等は果して熱心であつたであらうか。

## 五

九等定戸のための資賦の法定価格は、奴婢についてしか定められなかつたらしく、また事實上奴婢のみによつて定戸が行はれたとすれば、奴婢の正価規定について更に吟味する必要がある。前述のようにそれは和銅入年格で「奴一口准直六百文、婢一口四百文」と定められた。一方清和朝次郎博士の研究によれば、「天平中期に於ける中等の品貨を有する成年奴一人の標準価格は、絹入百束（錢二十貫）位であり、同じく婢の場合は

六百束（銀十五貫）位であつたらうといふ。

そこで滝川博士は和銅格の法定価格を以つてこの時代の標準価格とすることには、多くの危険を感ずるしとされる。<sup>三五</sup>さうすると、この法定価格は、直に准じられたものではなく、桁外れに安いものであつたことになる。しかしさうではあるまい。続日本紀和銅四年五月条に次の記載がある。

以穀六升当錢一文。令百姓交關各得其利

今かりに、この六升一文を以つて六〇〇文と四〇〇文とを米に換算すれば、三六〇〇升七二〇束と、二四〇升四八〇束とになる。奴の場合には滝川博士が実例によつて計算された標準価格と大差ない。婢の場合は差がありすぎるが、これは後で考へることにしたい。但し和銅四年五月から同八年五月までには貨幣価値に差が生じたであらう。が、一方は成年奴であり、他方は長幼の平均であらう。ともかく奴に對するかざり和銅格の法定価格は時価によつたと考へても大過ないと思ふ。和銅と天平との間の価格差は、貨幣価値が米価を標準としてみれば三〇倍近く大暴落

したからである。

さて滝川博士計算の標準価格によれば、奴と婢とは二〇貫対一五貫、即ち四対三である。従つて和銅當時、奴を時価に准じて六〇〇文とすれば、婢は恐らく四五〇文に近い数字であつたらう。とすれば何故に四〇〇文とされたか、それは奴一、婢一を合せて一貫とするためである。前場のやうにこの格は資貳一貫以上を下々戸として勸粟戸の最低に置いたのである。しかも資貳一貫以上という数字は、前格の基準を半減して導かれたのであるから、まづこの数が定められて後、これに大数で合致するやう奴婢の価格を決定したのであらう。何れにせよ和銅格に於ける義倉粟貳課の対象となる戸の最低限は奴婢一口宛を所有する郷戸であつた。

ところで和銅以後天平年間までには、前述のやうに、貨幣価値の大暴落があつた。従つて奴婢の価格も他の物価とともに急騰し続けたのである。しかし前述のやうに少くとも天平宝字二年までは定戸の資貳基準は変つてゐない。義倉条

古語は、和銅のそれをあはて、「臨時の処分のみ」としてゐる。いかにも法の建前はさうであつたらう。しかし定戸のための資賦基準が變つてない以上、資賦算出のための奴婢の法定価格と變らなかつた筈である。前述の靈龜三年十一月官符も奴・婢それぞれ六百文。四百文といふ体系の中で「長幼に依つて平估を立してゐることを令したものであらう。さうでなければ、實際上定戸の基準資産が刻々上昇し、従つて同等の資産の戸の等級が年々上昇し、かつて下々戸に定戸された資産と全く同等の資産を持つ戸が、二、三十年後には上々戸に格付されることになつてしまふからである。従つてかういふ經濟のことでは、奴婢以外の資賦の定戸のための評価は、その規率を政府が指示しない限り実施不能である。九等戸が事實上専ら所有奴婢数によつて定戸された理由はこゝに存する。奴婢のみに依るならば、資賦の算出は機械的にでざる。靈龜三年官符によつて具體的に如何に定まつたが解らないが、和銅格によれば簡單である。奴婢各々一口死なら下下戸、

二口死なら計二費で下中戸、奴二・婢五なら計三費二百文で下上戸に定戸すればよい。そしてこの評価が時価の何十分の一という法定価格で算出されるやうになれば、敢へて多貨に換算しても意味がない。その手續を省いて専ら奴婢の数そのものによつて定戸することが行はれたとしても不思議はないのである。

## 六

次に九等に格付する基準、具體的にいへば、何程の資賦を有するものを、如何等級に定戸するかという規定は、如何ようにして決定されたかという問題を検討しよう。この規定にはハツキリした変遷がある。従来の研究ではこれが系統的に把握されてゐない。すでにこれまで觸れてきた史料を整理して考察を加へよう。

(一) 大室令……一位以下、難色以上、即ち「良民の最下層までを含めて資賦により九等に定戸し、等級ごとに差を作つて輸粟せしめる。この場合、課税戸と不課税戸との區別は身分によつて決

まる。

(イ) 慶應三年格……大室令を修正し、中中戸以上を課税戸とし、中下戸以下は不課税とする。この場合の課、不課の区別は戸の等級によつて決まる。

(ロ) 和銅六・八年格……大室令にもとづき、前者は資賦二貫以上、後者は一貫以上の戸に対して凡等定戸を行ひ、これに大室令と同額の粟を賦課する。この場合、課・不課の別、即ち定戸の対象となるか、ならないかは、一貫若しくは二貫以上の資賦を所有するかしないかによつて決まるのである。天平宝字二年格……和銅八年格に修正を加へ、定戸はこの格によるが、課税の対象を慶應格によつて中中戸以上とする。この場合、課・不課の別は十貫以上の資賦を有するか否かによつて決まるが、定戸の対象になるか否かは、一貫以上の資賦を有するか否かによつて定まる。但しこの修正がこの格に始まるか否かは、格文のみからは断定しかねる。

(四) 延喜式……新たに内外五位以上の有位者に対

しては、位階の差に応じて輸粟せしめる規定を細へてゐるが、課税の対象は中中戸以上であり、輸粟額には変化がない。但しこの新規定の追加の成立年代は不明である。

さて今二二では考察を当面の問題だけに限りたが、(一)では雑色以上が必ず下々戸以上に定戸さへ、輸粟の義務を負ふ。現に大室二年美濃国の戸籍の定戸はさうなつてゐる。即ち良民で定戸に属する戸は存在し得ない。(二)は定戸に属する変更ではない。中下戸以下の義倉粟を免除したのは、この階層に属する限り入斗以下、一斗以上の減税である。そして美濃国戸籍によつて推察すれば、恐らく地方諸国に於いて中中戸以上に定戸されるものは数へる程しかなかったから、事実上殆んどすべての公民の減税を意味する。これはこの格で庸が半減されたことと換を一にするものである。無論その結果、義倉貯粟の増加は殆んど見込めなくなつたであらうが、政府は救済の貯穀を正税に求めたであらうし、事実また正税に

よる賁貨・賁給が盛んに行はれてゐる。これに  
対し、大宝令に選つて義倉の再建を試みると同時  
に、慶雲格の精神をも生かそうとするのが和銅格  
である。つまり平等戸のすべてに課税する一方  
、一定の資財を持たない戸の負担を免除したので  
ある。これは実質的に如何なる意味を持つか。

まづ和銅六年格は、前述の資財評価の換算規定  
をとらなつてゐなかつたとすれば、現実には実施  
不能で、結局それまでの中戸を下戸に定戸す  
るやうなことが行はれたのではなかつたか。何れ  
にせよ政府の予想した輸粟額より遙かに少ない  
のであつたらう。そこで政府は、課税戸の範囲を  
拡大するともに、奴婢の法定価格を定めたのであ  
らう。いまかりに美濃国戸籍で全郷戸の奴婢所  
有状態が解る加毛郡羊石里の戸籍を、時期を超越  
して使つてみると、大宝令では輸粟の対象が全  
体、即ち五三戸のすべてに及び、慶雲格では皆無、  
和銅八年格により奴婢のみで算定すれば、中下戸  
一、下々戸三、計四戸、全体の七三%が課税の対  
象となる。これに対し安房国義倉帳では輸粟の

対象となる戸は八八戸で、全体四一五戸に對し二  
一%に當るが、美濃國義倉帳の場合は九九戸で全  
体一〇一五戸の九七%に當る。美濃國戸籍を使  
つた計算は十三年の年月を無視したものであり、  
その結果を天平の義倉帳と比較することはさらに  
十五年の年月を無視したのであるが、とにかく  
慶雲格に比較すれば輸粟戸の対象はかなり増加し  
たであらう。少くとも天平二年の安房越前兩國の  
状態は以上のやうであつた。

さて和銅格の場合、一定の資財を持たない戸は  
「輸粟の例に在らず」或は「輸する限に在らず」  
として定戸から除外される。これが所謂「外戸」で  
ある。逆にいへば下々戸に編入さるべきものに制  
限が附せられないかぎり、下々戸に入れない戸、即  
ち「外戸」は出現しないのである。嘗て新見吉治  
博士は美濃國戸籍に「外戸」が見えず、安房越前兩  
國義倉帳にこれが見えるのは、前者は郷戸単位、  
後者は戸単位に定戸が行はれたからであるとし  
たが、<sup>註一六</sup>私は以上の考察によつて「外戸」は和銅格  
以後に出現するものであり、大宝の戸籍に見えな



いのは当然であると思ふ。なほ下川邊雄氏によつて、前國義倉帳の定戸と郷戸単位であり、且つ安房國のそれは長狹郡、越前國のそれは丹生郡の義倉帳であることが明かにされてゐる。<sup>註三</sup>

以下つけ足りであるが、<sup>註四</sup>即ち天平宝龜二年格は、中下戸以下の輸粟を免除するものである。かりに天平二年の義倉帳にあててみると、輸粟戸が安房國長狹郡では八戸から僅か二戸に激減し、越前國丹生郡では九戸から一戸に激減する。これと時間を無視した計算であるが、要するに中堅豪族層以下の負担が免除されたのであらう。かういふ実質的減税は、何時どうして行はれたか。結論だけをいへば、既に坂本博士の指摘された藤原仲麻呂の人氣取り政策の一つ、つまり中男、正丁、老丁、耆老の年令を一えつゝ繰り上げて諸貢租賦課の年限を短くしたこと<sup>註五</sup>と一聯のつながりを持つ改訂であらう。

以上要するに定戸の基準は輸粟戸決定の基準と密接な關係を持ち、全く政治的に決定さるべき向題であつたと思ふのである。従つて大望三年の

戸籍と天平二年の義倉帳とについて、各等級に定戸された戸数を配列して比較すること等は、宮本氏のように「等級詳細標準の相違によつて嚴密な比較は出来ない」といふ条件をつけられても、殆んど意味をなさないのである。また等外戸といふとその文字に引かれて極端な貧窮戸と考へる傾向が強いが、これも定戸の規程が変れば直ちに下々戸に編入され得るのである。全公民を定戸するか、或は貴族によつて定戸の対象を制限するかは、全く政治的に決定されるのである。荒川博士の計算によれば、伊賀の壺田三所六段、駿河の中等の馬二匹の価格に相当するといふ成年奴一口を所有する戸も、天平の義倉帳では下々戸にさへ入らないのである。また大望二年戸籍で奴婢を全く所有しない下上戸が一戸（半布里）、下中戸が五戸（半布里三、栗栖太里一、三井田里一）見えてゐるが、若しこの年に和銅八年格と同一の格による定戸が行はれたとすれば、直ちに等外戸に歸着するのである。このやうに等外戸の構成も複雑である。そしてこれはまた外の等級についても云へること

で、義倉帳に記された九等戸の構成が、奴婢の數に依るものであるかぎり、現実の社会生活に於ける貧富の構成は、或る限度までしかそこに投影されてゐない。循環論法ではあるが、美濃国戸籍に於いて、奴婢の數はそれのみで貧富の差を決定する規準になつてゐないからである。

七

義倉帳に記された數字は僅か二、三行に過ぎないが、それ故にその解釈には數十行、数百行が費されぬはならない。大宝令の義倉規定の変遷と運用を具体的に追求することによつて、大宝戸籍と関連させながら、私は義倉帳の史料的性格批判を一通り行つた。そして私の見解の主要なものは以上で盡さる。しかし、それが一つの試論に過ぎないことは誰よりも私自身よく知つてゐる。疑問の解決はあくまで今後に残されてゐる。そして一方例えは律令に於ける資賦の概念、奈良時代に於ける貨幣の流通、貨幣価値の変遷などの向題が明かにされることは疑問の解決を一步進の

ることになると思ふ。この意味に於ても広く諸家の御教示を乞う次第である。

註一、安房国義倉帳は大日本古文書三所收の恒馬国義倉帳（正統帳）に継張されてをり、その紙に天平勝宝二年十月二十日の年月が記されてゐるので、この年のものと見る人が多い。しかし安房国は宮本牧氏の指摘されたやうに（註五論文）、鏡日本紀によれば養元二年設置、天平十三年上総国に併合、天平宝字元年再び分置されてゐるから、竹内理三教授（寧楽遺文上）に従つて天平二年のものとするべきであらう。

註二、律令時代の農民生活に二章十節。但し十一戸下中は十二戸下中の誤りとする。さうしないと下下己上八十八戸にならない。

註三、三等戸九等戸考（史学雜誌一〇の九）

註四、三等戸九等戸考（史学雜誌一〇の一二）

註五、古代村落社会に於ける階層分化の一考察（史学雜誌六一の八）（以下單に宮本氏といへばこの論文を指す）

註六、『淨御原令の班田法と大宝二年戸籍』

二（史學雜誌六三の一〇）

註七 「戸籍より見た大室令前後の變遷」ハ

書陵部紀要五

註八 「養老律令の施行について」ハ史學雜誌

四七の八

註九 「我が律令時代の戸の等級」ハ（日本「

史五二）

註一〇 前掲論文

註一一 註一二 「続日本紀」同年月条

註一三 中田薫博士の復旧条文ハ「唐令と日本

令との比較研究」ハ「養老令成立の系」法政

史論集ヤ一所收ニによる。

註一四 大日本古文書二所收

註一五 「日本奴隷經濟史」三篇一章

註一六 「中古初期に於ける族制」ハ（史學雜誌二〇

の三）

註一七 「表急について」ハ（史地理入三の三）

註一八 前掲論文